

高粱の 近代化遺産 ⑮

伯備線を考える

明治維新の後、わが国には欧化主義や廃仏毀釈など、日本の伝統文化を軽視する風潮が横溢。わが国古来の文化財破滅の危機を招きました。そこで、文部省の前身となる大学は、太政官布告「古器旧物保存方」を布告。文化財の散逸防止を促しました。これが、わが国最初の文化財保護措置です。

明治13年からは、内務省が古寺保存金を全



高粱高校前踏切。御根小屋跡を線路が横切っています。

国の寺社に交付。明治21年には宮内省に「臨時全国宝物取調局」が設置され、岡倉天心らが古文書や絵画、工芸品、書跡などの宝物類を調査。優品に対する鑑査状発行や登録

業務に携わりました。明治30年の「古社寺保存法」は、古社寺が保存する建造物や宝物の保存を目的としたもので、「文化財保護法」の原型となりました。

わが国は僅か約30年で近代化を成し遂げた国です。急速な土地開墾、道路・鉄道の新設、工場設置などが史蹟や天然記念物の破壊を招きました。こうした背景から制定されたのが、明治7年の太政官達「古墳発見ノ節届出方」、明治13年の宮内省達「人民私有地内古墳発見ノ節届出方」、大正8年の「史蹟名勝天然紀念物保存法」でした。

このことを踏まえて、伯備線を下ってみましょう。倉敷起点35・49キロメートルにある「高粱高校前踏切」で、線路は御根小屋跡を横切っています。鉄道遺産という言葉が使われる今日、「高粱高校前踏切」はどう評価したらよいでしょうか。

『伯備線建設概要（鉄道省岡山建設事務所、昭和3年）』は、高粱以北のルート選定に際し、成羽回りも検討したと述べています。現在の国道313号線と県道新見川上線を辿るルートであったらうと想像します。伯備線計画が持ち上がった大正期、成羽町坂本の三菱吉岡銅山に陰りが見え始め、反面、新見市井倉地区の石灰が、新しい建築資材の主役・コンクリートの原料として注目され始めていました。事実、伯備・姫神・芸備線開業を睨んだ小野田セメント（現在の太平洋セメント）は、伯備線開業後、新見市正田に阿哲

工場を建設しています。

井倉回りは敷設費に於いても有利であったようすが、開業後の貨物・旅客輸送を考慮すると、鉄道省は「高粱高校前踏切」を設けざるをえなかったのではないのでしょうか。



備中川面駅の木野山駅方に架かる第二高粱川橋梁。もしも、伯備線が成羽回りで敷設されていたら、この景色は存在しないかもしれません。

伯備線が高粱川を渡るのは木野山駅・備中川面駅間が最初で、高粱市内には第一から第四までの高粱川橋梁が架設されました。もしも、伯備線成羽駅が開業していたら、4つの高粱川橋梁や方谷駅は存在しないかもしれません。

大正15年6月20日、備中高梁駅が当時の市街地から離れた場所に開業しました。駅が町外れに建設された理由には諸説あるようですが、伯備線の歴史を振り返ると、高粱の近代は一層おもしろいものになります。

（文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニケーション学科准教授・小西伸彦さん）

編集と発行(毎月15日発行)高粱市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高粱市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

本紙は環境保全のため再生紙を使用しています。

